

# 研究通信

No. 18

1955年12月刊

会員研究部  
社会集落編  
平丁教育  
片市台北大学  
東北大學研究室  
学部研究室内

## 知識を全体のものに

(東京) 有賀喜左エ門

今度の大会も前二回の大会と同じように参会者の心持がとけ合つて何ともいわれない気持の良い雰囲気であつたのはうれしい。こうして今思ひ出してもそのあと味といふか、はとぱりといふか、それが心の中に消えないで残つてゐる。もう三回も重ねて来たのだから、これが村研の伝統となりそうな気がする。

研究発表の形式や時間はあれで良かつたのであろうか。どの人も沢山発表したいことをみな残して終つてゐるようだ。どうしたらもつと充分に話して貰えるだろうか。一つの研究発表が終つたあとの質疑応答があまりできないことは他の会合と少しもちがつていかないことは残念だし、この点をもう少し変えて行きたいのだ。あの討論会は討論会で面白いのだが、個々の研究者の立場や考え方方がその時に充分に出るとは云われないから、研究発表についてもつと話合つて行かなければやはり物足りない。

討論会の方は答問さえ良ければ当然うまく行くのだとと思う。その点で今年は前二回のそれより良かつたし、進歩したと思う。小池君や並木君がリードしてくれたことも有難いことであるが、運営者や主催者なり関係の人ももつと

話をして良かったと思う。井森君が出した村の共同生活の面で人手がどんな風に入用であるかという問題は、個々の家の経営や経済とちがつた角度で考えられる人口問題として見て良いと思うが、話の調子で全然話題として発展しなかつたのは惜しかつたと思う。大体家の経済や経営における人口の問題に主題を引きさらつて行つてしまつたのは、従来その方面が主となつてゐるからである。そして今年の共同課題の出し方でも農村家族の構造が主になつてゐたからだ。だからこの問題を追求したのも当然とはいひ得る。村研のあり方としてはマクロな問題を背景にしてミクロなアプローチをしようとしているのであるから、一応農村家族から出発したが、これらは当然村落全体の問題につながるのだから、村落の人口問題という点に關係づけなければならなくなると思う。井森君の問題の出し方を詳細に聞く余裕がなかつたのは残念であるが、もつと整理してもらつて、もう一度出して頂くことを希望している。

テーブルの成文化ができてから再検討したいと思うが、今までわからぬ点も随分多い。我々が接するとして見出すのに充分でなかつたことが確認されている。しかしこの問題は容易でないことを感する。家の問題はわかつたようで、まだわからぬ点も随分多い。我々が接するとの出来た個々の農家の人生観にしても、日本の歴史を背景として形成られて來て、今日の家生活を深く動かしているのだから、経済構造や社会構造を浅く考えてしまうと、その深みに我々の眼光を到達させる事もできなくなつてしまふということを、我々は最もおそれなければならない。村研はそれぞれの人々の専門科学の知識を、その専門に捉われずして我々全体のものにすることに目標をおきたい。